

第 3 回安曇野市消防委員会

1	審議会名	安曇野市消防委員会
2	日 時	令和 2 年 11 月 10 日 午後 6 時 30 分から午後 8 時 20 分まで
3	会 場	本庁舎 4 階 大会議室東
4	出席者	小出委員長、寺畑職務代理、井口委員、小林委員、伊藤委員、 白井一史委員、白井宏委員、平倉委員、塚田委員、小松委員 相馬委員（消防署長）、二木弘委員（団長） 危機管理課 消防防災係 課長補佐 竹内 担当 丸山、八田、山田、有坂
5	公開・非公開の別	公開
6	傍聴人	0 人 記者 0 人
7	会議概要作成年月日	令和 2 年 11 月 24 日
協 議 事 項 等		
【会議の概要】		
1	開会	
2	委員長あいさつ	
3	会議事項	(1) 消防団員確保対策について (2) その他 ・ 令和 2 年度年末警戒激励について ・ 令和 3 年安曇野市消防団出初式について
4	閉会	
【会議事項】		
		(1) 消防団員確保対策について
委員長：	前回会議で、消防団員確保の方策・意見のまとめをお願いした経過があるため、本日はそれぞれご意見を出していただきまとめていきたい。皆さんの経験話や様々なアイデアを出していただき、団員確保ができるような方向で検討していきたい。	
委員 1：	私なりにいろいろ考えてきたことを話したい。 今回の市民タイムスの記事にあるように、メディアとか一番身近な『広報あづみの』を使い、団員確保のために地域の方に消防団の活動内容を知っていただくような手段を取ったらどうかというのがある。団員が不足しているということを前面に出すよりも、消防団活動はどういうものであり、どのように地域に密着しているかという内容のものをつくり、地域の皆さんに知っていただくということを考えたが、今の若い世代はゆとり教育の世代のため、ある程度敬遠する人もいる。 消防団の活動は素晴らしいものであるということを前面に出して PR できるような広報や、例えばビデオメッセージみたいなものを作り、消防団の活動を更に知っていただくという内容で作ればよいと思う。 今はサラリーマンが多い時代で、各世代に消防団の活動を知っていただくために成人式での活動の PR、また、高校生や中学生に対してもある程度の PR ができる。消防団に入る前の世代に向けてこういう活動をしているという具体的な内容で、さらには小学校ぐらいの世代まで掘り下げて、消防団というのはこういうものだと小さいうちからもっと認識してもらえないといい案があればと思っている。 また、地域の若い世代に消防団に入っていただくための PR として、地元の企業向けにビデオメッセージのようなものを作成して、消防団に入っていただきたいという具体的なものをつくれれば考えた。しかし、若い世代が消防団に対して敬遠する姿勢があるのは、昔ながらの体質が頭の中にあって、体力がなく仕事との両立ができないなどの理由で入らない人が多いと思われるため、もっと団員の活動を見直していくことも必要だと思う。 さらに、消防団に入るには家族の協力も必要であり、家族にどう理解してもらうのか。市民に理解してもらえる内容のものをつくっていくことが、活動を理解してもらえる一番の方法だと思う。	
委員 2：	消防団員確保は非常に難しいことであり、実際に消防団員が不足していることを考えなければいけない。逆に言えば、不足していなければこういうことを考えなくていい。なぜ不足しているか考えると、今の若い人たちの地域に対する郷土愛などが昔に比べて少ないと思う。また、考え方の違いもあると思う。	

そこで、どうやって消防団員を確保するか。言えることは、魅力のある消防団、やりがいのある消防団というのが一番大事だと思うが、一言でそれを言っても、若い人たちに伝わるかどうか、それが一番問題だと思う。

私も若い頃消防団に誘われたときは、地域の一員として参加した。訓練だと言われると、正直に言うと嫌だなというのがあった。入団してすぐに喇叭班にも入り、活動回数は非常に多かった。練習などで仲間ができて、自分の地域だけじゃなくて、広域的に仲間ができた。振り返ると、後々の考えになってしまうが、消防をやった人は皆、消防団に入団してよかったと感じていると思う。それをどうやっていろんな人に伝えればいいのかすごく難しいと思う。

私なりに考えたが、PRとかでなく、それぞれの区長さんに向けて、消防団員が不足していますと伝え、区単位で推薦できる人または新しく引越してきた人に、行事の際に伝えてもらい、ぜひ入ってもらいたいということをお願ひしていったらどうかと少し考えた。

委員 3 : 皆さん、団員確保について大変悩んでいると思う。自分たちが一週間や二週間お願いしに行っても、断られてしまう。団長をはじめ団員は苦勞してやってきているが、どうしても成果が出てこないというのは承知のことだと思う。

団員を確保しなければいけないという中で、私の考えとしては、消防経験者の方々からお話を聞く機会を増やしたり、OBの方々にもう一度入団していただいたりというように、もう少し関わっていただけるような態勢を取りたい。消防経験者が区長や常会長を歴任したり、市のいろいろなことに関わっている場合が多いと思う。そんな中で提案をして団員確保について訴えていったほうが、加入率は高くなると思う。

どうしても消防というのは苦勞ばかりで、あまりいい目を見ないという思いもあるが、私もかつて操法を経験して、勝敗が出ることで、団結や仲が良くなってきた気がする。そういうことを少し考えながら、団員確保を進めていけばと思う。

委員 4 : 自分が入団したときには、周りの皆さんから声をかけられた。何もわからないような状態で入団するのが実際に、内容がわからないと入りにくかった。

まず、消防団は魅力ある団体でなくてはならないと思う。消防活動以外の飲食を含めた活動をもう少し説明を行い、入団していただくようにしたらどうか

また、区の中でも団員会などが年に数回開かれていると思われる。私どもや消防経験者OBを含め、そういう会議の中に参加して、実情を説明する中で、人を集めていくような方法がいいと思う。消防に入る若い人たちは世代が違うため、昔みたいなわけにはいかないと思う。魅力がないと入ってくれないため、ビデオなどでのPR活動を考えていけたらと思う。

委員 5 : まず、消防のPRはもう十分知っていると思われる。

消防が何をするとおころかはみんな知っていると思う。それよりも問題なのは、私たちの年代からどうこう言える問題じゃないということ。各部を見ると、飲食をやっているところもあるようだが、みんな集まって何をやっているかという、下を向いてスマホのゲームをやっている。時代は変わっており、もう願ひするしかないが、考え方をもっと転換していかないと、団員は集まらないと思う。

私が消防団に入ったときは、誘われて入った形。地元に戻ってきて、ある職場へ入って、そこで誘われたという経過がある。結婚と同時に堀金に来たが、堀金でも隣の人に誘われて入ったという経過で、やはり誘うしかないと思う。

いくらPRといっても、みんな知っている。団員が不足しているのも知っている。もっと年齢の若いところ、例えば同級生などで誘っていくしかないと思う。

委員 6 : 前回消防委員だった人は知っていると思うが、中信4市がそれぞれの消防団のPRをまとめたものあり、安曇野市はPRしているほうだと思う。ホームページを作成したり、いろいろなところで消防団活動している中で、PRはしていると思う。

軒並み勧誘に回っても、親が出てきて、うちの息子は入りませんというパターンが圧倒的に多く、年上の者数名で行き、入らないかというような誘い方をするしかしょうがないのかというふうには実際は思うが、それでは限りがあると思う。ある程度の人員を確保するということが出来れば、もう少し消防団活動を整理して、目に見えるすっきりした形がほしい。

例えば、PRはしているが、消防団員になるとこういった企業からこんなサービスを受けられますなど、ホームページを見ればわかるが、積極的に行かないとわからないのではなくて、何気目に入るような形の方向にもっていくしかない。そういうところの見直しをしていくことが必要。

また、区長会というものがあるが、残念ながら区長のほとんどが1、2年で交代のため、区長会というのは当てにできないと思う。ただ、地域全体を見ていくと、区長さんというのは立場的には権限があるのに、そこがうまくいかない。こちらから願ひ

しても、来年になったら代わっている場合があるため、申し送りはしているが何もやらないという形が多い。そういうところはどういうふうにしたらいかわからない。区長さんをお願いするといっても、申し送りばかりで何もできないまま終わってしまう。それなら、逆に消防団から地域の評議委員会などの全体の会議等へ行き、説明して協力をお願いするというのも考えていかなければいけないと思う。

委員 7 : 新任なので今までの経緯がよくわからないが、まず、消防団に入らない理由だが、軍隊染みていて嫌だとか、土日にいろんな活動があるため、時間の制約がある。会社などに勤めている方は、土日を潰したくないという思いがある。私は小倉だが、若い人たちは果樹産業のためにIターンとかUターンという形で帰ってくる人がいる。私の息子は35歳で東京から帰ってきて、家業を継ぐということで農家をやっているが、JA青年部などの組織に関わっており、地域の同年代の果樹生産仲間と声をかけ合っているため、そんなに団員確保に困っている様子は見られない。常日頃の同年代との交流が大切である。消防団以外で地域の同年代の若者が集まれる機会を通じて、消防団に勧誘していくという方策が取れればと考えている。それと、私も分団長を経験したことがあるが、私たちの頃は一旦消防団を退団して、50代後半から60代の方が分団長になっていたが、安曇野市になったところから、団員から分団長に継続的に上がっていく形に移行してきた関係で、地域からみた消防団のイメージは、若い人たちが詰所で騒いでいるような、あまりいいイメージを持たれていないことも聞こえてくる。私が入ったときには、新入団員が詰所で飲食したときに、世間話のような話ができたとし、自分と同年代の子どもを持つ人に、消防団に入ってくれないかと話もできた。今は完全に若い人たちだけの集まりになっているため、地域から分離したような組織で、災害時にはいろいろ活躍しているが、平時には消防団はあまり関心を持たれていないような組織に変わってしまった気がする。

委員 8 : 消防団というのは大変な業務で、朝早くて夜は遅く、火事があれば出ていかなければいけない。その辺も理解してもらった上で、PRして何とか入ってもらおうという形になると思う。あとは、地域のつながりと親睦が大事で、適任の人が近くにいたら誘うとか、消防団はつながりが大事だと思う。それと、PR活動のために広報紙を発行しているが、消防団に入るとこんな特典があるなどについて、継続してやれば良いと思う。また、区長を通して人材を探してもらおう。転入してきた30代、40代の若い人が結構いると思う。

委員 (署長) : 自分が入ったときも、きつい・汚い・危険と3つの用語で消防というのは表されていた。消防団の皆様方は、消火活動であっても、法被を着て長靴履いてという活動だったが、現在は安全体制が整ってきている。自治体もしっかりと安全活動の面を謳ってきているのではないかと。消防団の制度の中で、OB団員または平日限定の消防団員の機能別というところを考えていくと、これを団員確保として見るかということがまず問題だと思う。消防団活動に参加したい、地域を守りたいという気持ちがあれば、OBの方でもお願いすればいいと思う。あと、市の新規採用職員には消防団を体験してもらい、入団を促していく。一般の方の消防団員を募ることについては、去年からの話し合いの中で、退職金の見直しや、区・PTAの役員の負担軽減ということも意見を交えてきた。ただ、区・PTAの役員の軽減となると、各地区や学校の規約等が入っているため、難しい場合がある。PRとしては、ホームページのアクセス等、各分団のいろいろな活動を発信していただいでいて、閲覧ことはできると思う。また、全国の消防団を参考にすると、ラッピングバスなどを活用し、消防団活動や、私にできる地域貢献という形で、安曇野市消防団の電話番号を貼りつけるなども一つの例として、市民に見てもらおうのも良い方法だと思う。あと、消防団車両の運転に当たっては、免許制度の改正があったため、準中型免許の補助制度を実施することも可能ではないかと思う。

委員 (団長) : 皆様のご意見を聞いた。消防団は団員確保委員会を立ち上げて、団員の気持ち、今どうなっているんだということ吸い上げて、今後どうしたらいいということで、活動案を話し合っている。PRはこれ以上何をやらしたらいいのかというくらいやっている。具体的に言えば、ホームページなどは閲覧者が自分から閲覧しにいかねばならない。団としては、行政の皆さんに長居していただきたい。当然お金がかかるPR

もあるが、それをどのようにやっていったらいいかという相談はしている。また、松本消防協会の3市5村として、FM長野で毎週金曜日にラジオ放送をしている。松本消防協会としても団員確保は悩みであり、とにかくPRしている。ただ、どうしてもPRだけじゃ足りない。全力は尽くしているが、全国的にも長野県もそうだが、若者の気持ちが変わってきている。

たしかにポンプ操法はきつい。でも私の考えとしては、災害が起きたときのために、必要な訓練だと思う。ただ、それを言ったとしても、そんなものはいらないんじゃないかと話す団員もたくさんいる。それを今悩んで、県の消防協会も県のポンプ操法大会をどうしたらいいかということまで対策委員会を立ち上げてやっている。だが、若い人たちの気持ち、ただ集まって、時間を割いて、何かを得て、かっこいいとか身についたならいいが、今の若い人たちに聞くと、休みが欲しいとのこと。仕事をして、その後に消防へ出ていかなければいけない。その気持ちを解くにはどうしたらいいか。

分団長をはじめ、団員の皆さんに相談しながらやっているが、なかなかいい案が出てこない。私から下げるのではなく、団員の皆さんの意見まで聞くようにしている。OBの皆さんならわかると思うが、昔のイメージでは、団長というものは雲の上の人間だというくらいの感覚で消防団をやっていた。それが今は全然通用しない。はじめをつけるところはつけるが、新入団員の皆さんの声を聴くなどして、きついんだよねとか、僕たちお酒飲めないんだよねとか。お酒は好きな人がいれば、嫌いな人もいる。詰所でお酒を飲めとかこちらは言っていない。それが輪になってくればいい。そういういい雰囲気の方をつくれれば、何とかかなと思う。

また、ある地区へ団員の勧誘に行ったら、お父さん、お母さんたちが出てきて門前払いになる。そういうのがずっと続いていて、勧誘に行くのは嫌という形。私たち世代の子どもたちは本当に意見を聞いているのか。消防団はこういうふうになっているが、皆さんはどうなんだと、もう一度いろいろな地域の若者の気持ちを聞いてもらい、言ってもらいたいと思う。

区長会とかはもう無理だと思うが、私が地元で勧誘に行ったときは、区長、代理、皆さん全員で5、6人いて、勧誘したがだめだった。そのときは印鑑をつくが、活動には出てこない、そういう人が多い。若者が仲間同士で誘い合うとかもやり尽くしているくらい。

以前にも言ったように、機能別のことも考えていかなければいけない。現在の団員に長く居てもらうにはどうしたらいいか。それには、報酬を上げるなど、いろんなことをやってきた。でももう頭打ちで、違うPRの作戦があればと思っている。限界ということは言いたくない。何とか団員確保に努めたいと思うが、現状はそんな形で、PRはこれ以上ないというくらいやっている。

委員長： 団長から、現状の団の活動についてのお話をいただいた。皆さんから出していただいたが、1つは、消防団の活動についてまだ知られていないだろうという意見があって、PRは十分にしているという意見もあったが、団員になってもらうには、まずは知ってもらわなければいけないということがある。もう1つは、入ってもいいと思う活動なのか、そういったこともいくつか出していただいた。現状、安曇野市も団員になることのメリットなど、いろいろ手を尽くしていただいている。そんな方向から、PRすることについて、新しいアイデアを出していただければと思う。

委員（団長）： 先ほどラッピングバスという話が出て好感が持てた。というのは、首都圏では大型トラックに大きくラッピングをして、街中を走らせながら宣伝をしている。安曇野市にも業者がいるが、少しでもラッピングができれば、結構知られるのではないかなと思う。

委員2： 私は発想の転換という言葉が頭に浮かんだ。消防団を勧誘することが目的だが、発想を転換した中で何かいい案があればと思った。転換した中で、安曇野市の中に消火栓が多くある。消火栓を操作できるのは当然消防署の人か団員で、一般の方は基本的に消火栓の操作はしない。OBがいればやるかもしれないが、消防を経験した人でなければ消火栓は扱えない。万が一、火災や災害があった場合、経験がなければ消火栓の水は出せない。そんなことで発想の転換をし、消火栓を用いたPRはどうかと思う。

委員長： 今のお話は、消防団の活動を広報する意味でということか。

委員2： そのとおり。
消火栓を使えるようになるには、消防団に入らなければいけませんというような形。

委員5： それは皆さん、地区でやっていないか。

消防団員が来て消火栓の使い方の講習会はやらなかったか。

委員 2 : 私は消防団に入っていたので。

委員長 : 団の中で今はやっているか。

委員 (団長) : 今は地区の自主防災会の皆さんがしっかりしていて、団としても消火栓の取り扱い訓練を地区の小さい単位でやっている。だからホースを伸ばして誰でも使っていていいですよ。必ず危機管理課に、消火栓使用承認届を提出してから訓練をやっている。どの地区もやられていると思う。地域の皆さんも消火栓を使ってもいいという中でやっている。

委員長 : 発想の転換の件でお話いただいた。
視点を交えていただいて、団員になると、今は食事をしたときに割引になるか。

事務局 : 消防団サポート店がある。

委員長 : 優遇されているのは、その 1 点だけか。

事務局 : サポート店でカードを提示すると、利用金額から 10% 割引や、ドリンク 1 本サービスとか、そういうことをやっている。

委員 5 : 質問だが、カードは実際に多く使われているのか。

事務局 : そういう報告は受けていないが、カードは配布してあるため、提示するかしないかは団員個人の意思になっている。

委員 (団長) : 私もカードは持っている。提示するかしないかは団員の気持ちだが、サポート店は全部で 60 店舗あり、飲食に行ってみれば、何%か割引かれる。協力していただいている店舗の皆さんに感謝している。
家族で食事に行ったときに提示を勧める店舗もある。調査しないと使ったか使わないかはわからない。私は大いに使っているが、協力してくれている店舗の方々にお礼を言うと、それ以上に消防団はしっかりやってくれていると言われる。ただ、皆が使っているかどうかはわからない。

職務代理 : その件で少し前に耳にしたのは、恥ずかしくて出しにくい人もいるということを店の人から聞いた。その店の人は、この人が消防団員ということを知っているため、店の好意で割引してくれているが、みんながいる前で出すのが恥ずかしいという認識を持たれている人たちも何人かいるということは聞いた。

委員 3 : 消防団 PR の件について、今やっていることを事務局に聞きたい。テレビ、ラジオや新聞などのメディアを使う中で、団員募集についてどの程度やっているかお聞きしたいのが 1 点と、もしそれがなければ、そういうものをもっと積極的に使って、サポートなどもやっているんだということを、団員だけではなくて全市民に PR して、女性や子どもたちにも関心を持ってもらえればと思う。

事務局 : 現状は、まず消防団に入ろうと書いたコルクコースターを、転入者向け配布物の一つに入れて、PR をしている。ただ、転入者といっても、若い人が入ってくる場合もあれば、高齢の方が入ってくる場合もあるため、それらを見分けるのは難しい。そのため、誰にでも配っている。もしかしたら高齢者の方の家に若い人がいるかもしれない。そういった期待を込めて全員に配っているというのが現状。
それから、消防団の広報紙を 2 年前から発行していて、次が 4 号になる。奇数号は全戸配布するように、新聞折り込みで印刷業者さんが刷ったカラーのチラシを配っている。また、偶数号については、回覧文書で区長さんを通じて皆さんに見ていただくようにしている。1 回に 30 万円程度かかるため、毎回印刷だと経費がかかってしまう。1 回は費用をかけて、1 回は自分たちで刷る形で、年 2 回 PR している。
あと、昨年からホームページを開設して団活動の PR をしているが、残念ながら何人見たかというのが確認できない。本当ならカウンターがついているといいが、今のところその予定はない。

委員長 : あと、団員募集のポスターというのは、団を通じて掲示しているのか。たまにコンビニとかで見ることがある。

事務局： 消防庁から送られてきたものを、それを掲示させていただいている。

委員（団長）： ホームページに関して、詰所でスマホを見ているという話があったが、今回のコロナの関係でホームページをかなり生かすことができている。というのは、レベルが上がったり下がったりするため、団員はどう行動したらいいかということが発信できる。分団長から示すのは当然だが、ホームページなら誰でも見られる。そこに、レベルがいくつになったからこういう活動を自粛しましょうとか、ここまではいいですということが発信している。ホームページの活用はいいと思う。何人見ているかはわからないが、そういう発信の仕方もあるということで、だいぶ変わってきている。

委員長： 先ほど団員のサポートについてあったが、こういったことの拡大等についてはどう考えているか。極端な話、消防団員になると市民税が免除できるなどはどうか。

委員3： 消防団員になったときのメリットについては、少し的外れだが、消防という危険な作業に従事している中で、危険物の取扱い、例えばプロパンガスや灯油などに関わってくるが、その中で、危険物の資格が得られるとか、資格を全部補助するわけではなくても、講習会を積極的に開いて団員に受講してもらうなど、草刈り機（ピーバー）の取扱作業教育があるように、活動の中で必要な資格は、消防団員ということで免除されている場合もあるが、そういう資格などに対して少し補助を出すなど、考えていけばいいと思う。

委員長： 資格についていうと、全額というのは難しいが、補助金制度があれば非常に助かると思う。どんな内容というのは、また改めて考えたい。
それから、勧誘に行ったとき、家族の同意が得られないということだが、先ほどのサポート的な話にもなるが、家族の皆さんにうまく理解をしていただけるような方法はあるか。
私の経験からすると、本人は了解したが、最終的に親が出てきて断られたという事例が何回もあり、非常にながかりしたことがあった。そこを何とか突破する名案がそのときはなくて、引き下がった経験がある。そのような関係で、今後こうしていけばという案はあるか。

委員6： なかなか難しく、私も分団長をやっていたころに経験がある。まず、団員が勧誘に行ったら話がこじれたら呼んでくれと、私が行って話をするからと言っても、母親は全然首を縦に振らなくて、息子がいても絶対出さないというところが結構あった。大変だと思ったが、家へ訪問しても、なかなか息子さんに会わせてもらえないときは、別のグループの付き合いで呼び出す。例えば当り障りのない早起き野球などに呼び出しておいて、仲間に入れてから勧誘するなどの、間接技で攻めていくしかないということもあった。しかしそれも大勢は厳しいため、1人か2人誘うという形だった。ダイレクトに消防団ではなくて、まずは違うグループのところへ勧誘しておいて、そこから消防団という形に持っていくのも一つの方法だと思う。

委員長： 相対的に皆さんからご意見をいただいた中で、活動を見えるようにして伝えていくということをまず考えていかなければいけないと思う。消防団としてもいろいろやっている部分があるが、もう少し広い意味で、市民の皆さんの目につくような活動が必要だと思う。まずはその方策を詰めていくことがいいと思う。

委員（署長）： 消防団はこんなメリットがある、市民を守り、町を守ることがこんなに重要だということは、常備消防としても必要なこと。消防団と一緒に連携していかなければいけないことは当たり前である。
9月に信州大学の先生に見ていただいたら、活断層に近いようなものが9本あって、そのうち6本はつながっているのではないかということ。なぜ消防団が必要かといえ、いつ地震が起こるかかわからないのではなく、いつ起こってもおかしくない地震に対して消防団の皆さんの力が必要だということ。
自主防災訓練などには私たちが消防団の皆さんと出向いて、地区の話し合いや講演の中で話をしている。危ないという言い方は市民をおおることになるため、あまりよい言い方ではないが、やはり皆さんの若い力が必要だということを全面に出さなければいけない。

委員長： 一番底辺の部分となる。
それから、広報は消防団にとって必要な部分であるが、広報活動はある程度プログラムのうちにちゃんと出来上がったものを形として作っていかなければいけないということになる。具体的に話を進めることはここでは行わない。
多角的に消防団の活動を知っていただくということになると思う。方策については、

今のような内容のものの広報であったり、あるいは活動そのものの内容であったりする。家族に対して云々というのは難しい部分があり、活動にはもっていけない可能性がある。

それから、区長会の話も先ほどから出していただいているが、私も昨年まで区の役員をやっていた。実際に消防委員をやりながら区の役員もやっていた中で、どんな反応をするだろうなど見ていたが、区長会へ出ていくとその話になる。大変だなどというところで終わってしまい、なかなかその先の話になると、個人のお宅へ訪問するということしか方法論がなくて、区の役員としても悩んでしまうのが実情である。

先ほど他の組織に若い人たちの集まりがあれば入っていただくということがあったが、違ったアプローチの仕方でも消防団勧誘があるんだということで、それも一つだと納得した。その辺はまた自分も区に帰って話ができればと思う。

しかしそれをどこでも同じように使えるかといったらそうでもない。それを違う形で提案できることがいいかと思う。それぞれの地区で特徴があるため、組織や団体ごとということになると思う。

本日ここでお話いただいた内容については、活動ができるだけ見えるようにPRをしていくということだが、複数の方策を検討していただきたい。現在行っている広報の活動をベースにして、中身を変えていく方法もある。あらためて違う広報紙を用意することも必要かもしれない。

簡単にいえば広報あづみのがある。そこへ載せるというのも一つの方法。また、起こるであろう災害について、市長はよくそういうことを言うが、具体的にどうかということについては、なかなか皆さんは目にする事ができない。頻度を上げるために市の編集方針の中で考えていただいて、その中で消防団はどんな活動ができるのかということにつなげていただければ、それも一つの方向だと思う。

あとラッピングバスの話だが、すごくいいことだと思う。お金はどのくらいかかるのかよくわからない。

委員（団長）： 今はコロナであまり運行していないが、市所有のバスに対して、三郷ではリンゴ、明科ではアヤメのラッピングだった。全体でなくてもよくて、後ろに少しだけでもあればPRできる。

委員6： 消防団に入ろうみたいな感じのちょっとしたステッカーなどを私の軽トラックに貼って宣伝してもいいが、遠くからだとかわからないかもしれない。農作業中に田んぼの畔に停めてあれば、通った人が見てくれる。

委員長： 細かいところはまた検討することとしたい。

事務局： ラッピングについては、皆さんからヒントをいただいてありがたい。公用車にそういうことが可能かどうか聞いてお答えをしたいと思います。

委員長： 広報紙の情報提供の内容だが、消防団がなぜ必要かを皆さんに知っていただく必要があると思う。

それから、消防団員の活動服は、紺とオレンジのカラーリングのウェアだが、火災のニュースを見ていると、消防団員なのか消防署員の方なのかよくわからないときがある。

私は以前とてもショックなことがあった。消防団員というのは消防署の皆さんと待遇が一緒ではないかということをおっしゃる方がいた。その方は長い間教育関係に携わっていたため、すごくショックを受けた。

一般の方々というのは、消防団と消防署員の認識がほとんど分かれていない可能性がある。消防団がどういう位置づけのものであるという情報を、ポンプ操法のときは表に出るが、それ以外のところも前面に出して、わかっていただけるような広報の仕方にしていったらどうか。

あと、団員のサポートの件については、費用がかかる部分であり、他で情報があれば調べていただきたい。そういう点で安曇野市は一生懸命やってくれている。より一層というところで、事務局でご検討いただけるとありがたい。

職務代理： 皆さんから出た話の中で、消防団員は大変だということで、団員の負担軽減の件についてご意見が聞きたい。私も団員の頃を考えると、消防団に入ってよかったなという思い。会社だと、この会社でよかったという思いがある。そういう消防団を目指すという思いでやっていたが、負担が少ないとかということについては、今の団の取り組み、それから休みがほしいなどの話が出ているが、団員の負担を軽減できるようなアイデアはないか。また、こんないい消防団だからみんな入ってほしいと声をかけることのできる、そんなポイントについてご意見がいただけたらと思う。

委員長： 今の意見だが、団の中で負担になっていることをもう一度お聞きしたい。

委員（団長）： 火災予防運動中は広報活動をしているが、それぞれの地区で合併に伴っているような考えがある。その違いをなくそうとして一生懸命やっている。まず、火の見櫓に登って警鐘することについては、労働安全衛生法の改正で、高さ2.0メートル以上は墜落制止用器具をつけないと登れないと決められた。しかし、私は団としてなるべく登らない。雨の日はもちろんやらない。登るなら転落防止を考えなければいけない。ただ、ある地区へ行くと、「なぜ鐘を叩かないのか」という声も出ている。それを何とか分団長からの説明でわかってもらえないかと話している。そういうことも負担になっている。

OBから話を聞くと、「なぜ広報が回ってこないんだ」というところもある。その団員の皆さんは一生懸命やっている。ここは必ず回らないといけないというところも聞いている。そういう部分を無くしていかないといけない。私たちは一生懸命やっているが、地域の皆さんからは「なぜやらないんだ」と言われることがあり、面倒な気持ちになってしまう。なるべく負担は減らそうと、年末警戒は一週間あるが、交代制で終了時間を早くしている。

毎月の広報は分団、隊で実施日が違うため、毎日各地区で必ず動いている。負担ではないと思って動いているならいいが、できないところもあるため、そういうところは無理してやらなくていいというように今は進めている。今後どうしたらいいか。他市消防団のように月に1回で、15日と指定するという考えもある。ただ、それを団が決めたときに、地域やOBの皆さんが不満を言わなければ、私たちもすぐそうしたい。また、半鐘を鳴らすことについても、今は減らしていつているが、団員はそれでも詰所にいたいという人もいる。それはいていただいて結構である。

何もかもトップダウンでやるのではなく、半鐘はせずに広報活動もこれだけやったら帰るなど、分団長に任せて、活動報告はブロックごとで副団長から私に上がってくるような形にして、できるだけ減らす状態にしている。

委員長： 時間的なものや、危険を伴う部分に関してお話をいただいた。

車両での広報活動については、合併当初にそれぞれの地区でやり方が違っていただけで、夜間の防犯の必要性はあるかということが上がってきたこともあった。豊科の方式を取り入れて、市内のどこかで毎日赤い回転灯をつけた車が巡回をしているという状況をつくらうということで始まった。その前は、当時の協会としては5のつく日に実施しなければいけないということがあって、月3回広報をやっていた。

皆が出てくるなら、部ごとに車両があるため、それを日割りにして自分の担当地区を巡回すればという経緯がある。ただ、人が減ってきていることがあるため、なかなかそれができなくて、月に何回も出なければいけないということが問題になっているかもしれない。また、日程がそこで縛られてしまうこともあるため、なかなか融通がきかないということもあるかもしれない。

方法については検討いただいて、団としての方向を決めていただければいいと思う。それから、打鐘の話だが、6.75メートル以上は手すりがない場所では墜落制止用器具をつけなければいけないというのがあり、火の見櫓は当然それに該当する。違う方法で検討いただくことがいいと思う。その辺は市としていかがか。打鐘がなくなってサイレンになるかということにはならないか。

事務局： 市としても、打鐘はしない方向だが、ホースを干さないといけないため、火の見櫓にホースを干す際に必要な、墜落制止用器具を来年度予算で購入するように予算要求をしている。

ただ、防災無線があちこちに設置されていて、サイレン音が鳴るようになっている。昨年の台風災害のようなことがあれば、スピーカーから危機感をあおるような普段と違う音を流すことができるようになっているため、半鐘でなくてもよいと思う。

委員長： せつかくある施設なら、市内一斉に鳴らすことも可能ということ。今のように一定の日になれば鳴らすというのも一つである。そこは検討していきたい。市の関係なので、この場で決められない。

委員（団長）： 団員は管内のホースタワーや火の見櫓などホースをどうやって干しているのかということ全部調査した。団でホースを干すにはどうしても登るため、墜落制止用器具が必要になる。来年度予算で購入し、提供していただきたい。ホースタワーがある分団については特に必要がない。

ホースタワーに更新してもらおうようお願いしているが、予算的なことがあり、すぐには難しい。

事務局： 先ほどの半鐘の件は、火の見櫓に登って叩くよりも、車両による広報を充実させて、市内のどこかで必ず巡回させるという方法ではだめか。どうしても叩いてほしいという地区はあるか。

委員長： 半鐘がなくなるということについて、委員の皆さんのそれぞれの地区ではどうか。

委員 6： 半鐘をなるべく叩かなくていいよという話も出ていて、できるだけやらせない方向で条件を決めてきた。というのは、朝忙しい中、会社へ行く途中で叩きに行った場合、もし落ちたりしてケガをしてしまうと困るため、叩くときは必ず2人体制でやるようにする。それと、当時は安全帯がなかったため、事務局に頼んで各詰所に1つずつ安全帯を用意してもらった経過がある。条件がそろわない場合、例えば2人体制のところ1人しか集まらなければ叩かない。風が吹いていたら叩かない。雨が降っていたら叩かないという形で、なるべく叩かない方向で動いている。それに代わるものとして、広報によって丁寧に巡回してほしいということ。そちらに移行してきている傾向がある。
当初は消防の日が決められていたが、途中から各詰所の都合のいいときにやる形に変わってきている。多分月に2回か3回で、それはずっと継続されている。

委員長： 代替えを考える必要はあると思うが、特に支障はないと思う。

委員（団長）： それが団員の負担にならなければ、団の会議の中で、もう一度各分団・部の考えを聞かせていただきながら進めていきたい。

職務代理： 例えばポンプ操法などのやり方を変えていくことなどには取り組んでいるとは思いますが、極論を言えばやめたほうがいいになってしまうかもしれない、そうではなくて、代わりにできるものなどはあるか。

委員長： ポンプ操法というのは、時間的なものや個人の負担があり、今年はコロナで中止になったが、これも一つの負担だと捉えられるかもしれない。
方法論、方向性ということについて何か皆さんが日ごろ思っていることはあるか。団員の負担軽減ということで捉えていただければと思う。団の中ではもう話し合われているのか。

委員（団長）： ポンプ操法に関してはいろんな意見がある。県協会がポンプ操法の対策委員ということで、昨年と一昨年、ポンプ操法大会の可否を新聞などで取り上げられた。
県協会の中では辞めるべきではないという話になった。
ただ、無理してやらなくてもいいのではないか。他市は違う方法で訓練をやっている、競技をやる分団はやればいいが、団としては代わりの訓練をしているという形。
市の消防団には出場するかしないかのアンケートをとって、押しつけでなく、必ず団員の意見を聞くようにしている。県や全国を目指す分団は、家族の負担が非常に大きいということを聞いている。本当にそれでいいのかと確認までして操法をやっていた。
あと、ある分団では、訓練の一環としてタイムで競うのではなく、操法をやらないとポンプの扱いはできないと言っている。また、詰所に集まって、定例会などで訓練を行っている分団もあり、団員はポンプを動かすなど各自で訓練をしている。
ポンプ操法は今後、県協会もやる方向ではいるが、一番ネックで負担が大きい。なぜやめるわけにいかないかといえば、先ほどの火災もそうだが、今年度の明科や穂高のように水害があったときポンプを使ってくみ上げる、そして堤防の中に返すという作業というのは、普段から扱っていないとできない。一度扱っただけでは自信がなくてできない。ポンプ操法は何回も同じことをやっているため扱えるようになる。そのため、ポンプ操法をやっていれば実際の災害で生きるが、なかなか統一はできない。
トップを目指して訓練する分団や、災害時に備えて訓練する分団もある。毎日やっているところもあるし、トップを目指さなくても週に2回やる分団もある。それについては、本当に負担だったらやめてもいいと言っている。正副団長でそういう話をしてる。
ポンプ操法に出場しない分団に関しては、どういうことを訓練するかというレポートをもらった。規律訓練や取扱訓練を行うなどいろんな考えを持って団員はやっている。

委員長： たしかに団員や分団・部それぞれの事情があるため、そういうやり方でいいと思う。操法をやった人は、いつでも扱えるし、正しく操作できるというベースがある。ふと車のことを思いながら話を聞いていたが、教習所へ行っても、机上の部分と実技の部分がある。検定もちろんあるが、ペーパードライバーでいるとなかなか車のこ

とがわからないため、こわごわ走ったりする。また、一般道路ばかり走っていると高速道路の走り方を忘れてしまって迷惑をかける人もいる。そういう意味でも、操法というのは役に立つ部分もあると思いながら聞いていた。そういったプログラムのなものがきちんとあればいいと思う。

そうはいつても、時間を要するため、それぞれ習得してもらうことが非常に大事である。ぜひ今のやり方で進めてもらいたい。団員全員がということはなかなか難しいが、ポイントになる人たちがきちんと習得して、それをまた後輩にどんどん伝えられるような環境づくりをしていただけたらと思う。

今日は最初のほうで、団員確保のためのPRを充実させていくという内容でご意見をいただいた。アイデアもいくつか出していただいたので、そこを事務局でまとめていただいているか。

事務局： 先ほどサポート店の話が出たが、今は王滝グループなどの飲食店が多く、利用金額から数%割引になる。増やしてほしい違う系統の店などについて団員や皆さんの意見も聞きたい。

あと、家族に理解してもらうためには、例えば団員の出勤手当を個人に支払えば、それを家族が見て、消防に行ったらお金がもらえてよかったとか、そういう提案をいただければありがたい。今までの形にこだわらず、斬新なアイデアをいただければと思う。

委員長： 今言われたサポート店の件を持ち帰っていただいて、それ以外にサポートできる方策について皆さんのお知恵を拝借したい。

それから、家族への情報の出し方だが、団員からうまく共有できていない部分もある。その辺の団員の待遇について、次回整理したい。

事務局： 次回何か用意するような資料はあるか。

委員長： 前にももらったと思うが、メンバーも変わっているため、団員の待遇について資料をいただきたい。

事務局： 出勤手当の件が可能かどうかも含めていろいろ調べたい。

あと、安曇野市と同じくらいの人口の佐久市は、団員定数が1,800人であり、安曇野市の倍となっている。実団員も1,700人くらいいるようで、よくこんなに団員が確保できると感心する。そういうところからの情報も聞いて、参考になる資料をお渡しできればと思う。

委員2： 後日で結構だが、団員の最高年齢の方と、分団長の平均年齢、そして一番若い方の年齢を教えてください。

事務局： 年齢構成の関係の資料を用意したい。

東京などの消防団の写真をみると高齢の団員が多い感じがする。安曇野市は若いほうである。

委員長： いくつか皆さんからいただいた。次回補足をして詰めていきたい。

今回は令和3年2月9日、火曜日18時半からとする。